

子どもたちの今を考える

田中 三保子

先日の新聞に、「公立小の校内暴力、先生相手急増」という記事が載っていました。「子ども同士や器物破損の校内暴力は十パーセント台の増加だったのに対し、教師に対する暴力は三三六件の過去最多で、十三パーセント増となった。中高生の校内暴力は減少し沈静化の傾向がみえるのに、小学生の校内暴力には歯止めがかかっていない（二〇〇五・九・二三 朝日

新聞朝刊）」とありました。私はこういった記事を読むと、教育現場の先生方の大変さを思うと同時に、校内暴力を起こした（ている）とされる子どもたちは、どんな幼児時代を過ごしたのだろうかと思ってしまう。その子一人ひとりにとっての幼児期がどんなものだったのだろうかと思うのです。解説には「教育委員会からの報告では、ささいなことで突発的に暴力に

訴えるケースが目立つという。とくに、矛先が教師に向かう例が増えたことが特徴だ。最近頻発した重大な少年事件では、たいてい何らかの前兆行動が見つかっている。小学生に何かが起きてはいないか、みきわめる必要がある」とあり、小学校での実効性のある

対策の必要性に言及しています。こういう状況では、抜本的な対策を探ることが、今、小学校には求められているのでしよう。でも、私は思います。小学生になる前の、「幼児期」にこそ大人はもつと目を向けてほしい、一人ひとりが充実した幼児期を送ることができなければ、こういった事態はそうそう起こらないのではないかと。

働く（働きたい）母親が増え、「保育に欠ける（ことなる）乳幼児」が保育施設の受け入れ人数を超えて、いわゆる「待機児」の数が問題になっています。仕事の間に子どもをみてくれる人や場所がなければ、母親が仕事に出ることは難しいからです。税金や年金

などの問題もあって、行政は待機児を減らしたりなくすことには熱心にみえます。でも、と私はまた思うのです。子どもの保育教育施設は必要数だけの問題ではない、そこで子どもたちがどんな生活を送っているかが大切なのだと。

私には、問題視される子どもたちの行動が、彼らの心の叫びのように思えるのです。それは、社会的には許されるべくもない行動とわかっていても押さえきれなくなってしまう子どもの、あるいは、その判断力も育てられないままにここまでできてしまった子どもたちの、「社会」に対する抗議であり、訴えであり、表現できない思いのあらわれだと思っております。その叫びは、乳幼児期のどこかで元が生まれ、適切に表現されることもなくしまわれ、ためこまれ、その後も外にあらわれ出る機会もないままに（もしかしたらさらに強化されて）幼児期を通り過ぎて、あるとき、一気に噴出してしまったのだと思えるのです。

幼鬼は自分の思いを自分で把握し、他者がわかるように表現することがまだうまくありません。さまざまな手段を使ってあらわしたり、あらわそうとしたりはしていますが、微妙だったり、わかりにくかったりして、大人にうまく伝わるとは限りません。そして何よりも、まだ大人の支えを必要としていますから、大人に嫌われたくないのです。自分の思いをわかってもらえなくても、大人の意向を汲み、意向に添い、結果として我慢をしてしまうことが多いのです。大人は子どももの本意ががんばりを理解せずに、聞き分けのよい「いい子」とみなしているのではないのでしょうか。

先日、薬局へ行ったときのことです。二組の親子が調剤を待っていました。二人の子どもの一人、三歳くらいの男の子がテレビ（床から一メートルくらいのところに置かれている）の前に立ち、「英語であそぼ」の画面に見入っていました。そのうち、放送に合わせ

て「on」「off」と声を出し始めました。二人の母親のうち一人が私の方をちらっと見やり、その子に声をかけそうになりました（私はこのときに、この人がこの子のお母さんなのねとわかりました）。あつ、制止されそうと感じて、私はその子のうしろから「じょうずねえ」と声をかけました。母親はことばを飲み込み、再び視線を子どもからそらしました。その子は背後の大人の状況とは無縁に、テレビに応答しています。声はだんだん大きくなり、画面の中でみんなが踊り出すと、合わせるように身体を盛んに動かし、まねして大声を出しています。一歳くらいの女の子がテレビの脇に立ち、男の子をじっと見つめています。視線はひたすら男の子の顔に注がれています。そこへ、初めに年配の女性、つづいてやはり年配の男性が入ってきました。ちよつと間があつて、母親は男の子の方を向き、名前を呼んで手招きました。男の子は振り向いて、それから母親の隣に腰掛けました。「英語であ

そば」は終わりましたが、まだ子ども番組は続いています。私はそこで薬局を後にしたのでその後の経過はわかりませんが、男の子のようすと母親のふるまいが印象に残りました。

私からは表情が見えませんでした。男の子は多分、テレビの中の人々の動きに吸い込まれるようにして、声を出し身体を動かしていたのだと思います。どんどん夢中になって、声も動きも大きくなっていきました。もちろん、周りは目に入っていないようです。三歳くらいの子どもにとつてはごく自然なふるまいですし、好奇心に引つ張られて全身が自然に動いていくようすが、私にはほほえましいとさえ思える光景でした。傍の女の子が引き込まれて、食い入るように彼の顔を見つめていた姿からも、彼の行動がごく自然なものであったことがうかがえます。私は、まばたきもせず男の子に見入っているその女の子の表情に、思わず見入ってしまったほどですから。でも、母親は彼を呼

び寄せ、彼は母親の顔を見てからテレビの前を離れ、もぞもぞしながらもおとなしく座っていました。

後から薬局に来た人が、明らかに迷惑そうな顔をしたわけはありません。でも、誰も何も発しない中、ひとり、男の子だけはずれている感じで、子どものふるまいをにこにこ見守る雰囲気は全くありませんでした。（女の子の母親も黙って違う方向を見ていました）。

母親が男の子を呼んだのは、そんな雰囲気の中で、子どもの行動が周りに迷惑になることを恐れたからでしょう。自分の場所から動かずに、名前を呼んで身振りですすといったやり方でも子どもに指示を与えました。そして、男の子は、あんなに夢中になっていたのに、母親の思いを感じとり受けいれ、すぐに自分の行動を切り替えたのでした。私は、男の子の母親の、周囲への過敏とも思える反応と、男の子の母親への、



これまた過敏な反応が気になったのだと思います。小さな薬局でしたから、男の子の声は否応なしに響きます。でも、英語の単語をときどき発しながら身体を左右に大きめに揺らしているだけで、うろちよろしているわけではありませんでした。男の子にはまだ調剤を待つことの意味はよくわからないでしょうし、訳のわからない時間を待ち続けるための大人の働きかけもありませんでしたから、目の前のおもしろそうなことに引き込まれるのは自然なことでしょう。薬局側でも、

子どもがそれなりに待てるようにと子ども番組をつけているのだと思います。ただおとなしく待つことを強いられて、テレビと一緒に動き出すことさえ許されないなんて、子どもにとつてなんと悲しいことかと思えます。でも、母親がそれほどまでに周囲に過敏になるのには、今までにそうせざるを得ない体験を重ねてきたということもあるのでしょう。母親たちは、子どもがその場にふさわしいふるまいができないのは、きち

んとしつけないからという周囲の視線にさらされてきています。結果として、子どもの視点に立つよりは、周りの視点から子どもを見て、子どもをおとなしくさせる方向づけをしてきたのだと思います。男の子の切り替えの早さは、そういうことの積み重ねの結果とはいえないでしょうか。

私の経験では、子どもは夢中になるとどんだんめりこんで、自分で納得しないと簡単には切り替えられないものでした。その子なりのやり方で抵抗や不服従の意思表示をします。子どもに納得してもらおうべく、私はあれこれ試みます。子どもは、話の内容でわかってくれることもありましたが、真剣にわかってもらうとする私の気持ちにに応じてくれる（と思われる）こともありました。聞きいれてもらえないことも、もちろんありました。あの男の子は、抵抗でも不服従でもなく、母親の説得の結果でもなく、あっ、だめなんだといった感じで、すぐに母親に従いました。いつもの

こと、といったようすにも見えませんでした。子どもの側が、母親の望むことを即座に読みとり、望まれている行動へとすぐに転換したのです。あんなにもあっさり。ただ待ち続けることは大人にとっても結構つらいものですから、子どもであればなおさらでしょう。でも、大人が支えてくれれば待てるものです。大人が、絵本を読みながら、手遊びをしながら、子どもが退屈しないように、しかも「待つ」気持ちを少しでももてるように、一緒に時を過ごす工夫をしていく。そういうことの積み重ねがあればこそ、子どもは待つことができるようになっていくのではないのでしょうか。そして、待つことを支えてくれる大人を心から信頼するのです。ひとり待たせて、動き出すと呼びつけて静かにさせることを繰り返せば、子どもはおとなしく座っているようになるかもしれません。でも、場や状況を自分で判断し、ふさわしい行動をとれるようになっていくのでしょうか。母親や大人の目があるからこの場は自

分を制止しているだけにならないでしょうか。

話は変わりますが、授業の中で、学生に三歳児の保育ビデオを見てもらいました。ひとりの男の子が、毎日一緒に遊んでいた友だちが引越して来なくなった日、促されてもおべんとうを片づけようとしないうるようすが映っています。「おべんとうを片づけない」ことに関して、あなたなら男の子にどうかかわるかと学生にたずねました。「手伝ってあげる」から、「片づけるまでは遊ばせない」というものまで、働かけ方はさまざまでしたが、ほとんどの人がとにかく自分で片づけるように働かけると答えました。理由は、自分のことは自分ですべきであり、やってあげることは子どもを甘やかして勝手気ままに許すことになり、集団のルールが守られなくなってしまう、幼いなりにルールを守ることは大事だから、ひとりだけ特別



扱いをするわけにはいかない、といったものでした。ルールだから守らせなくちゃと考えれば、例外なく子どもに自分で片づけさせようとしむけることになるでしょう。男の子にとって今日は特別な事情のある日だから、どうしようかと考えた人たちもいましたが、ここで許すとこれから先ずっとやらなくなってしまうのではとの危惧を振り切れず、やっぱり自分でやらせなくちゃとの結論になったようでした。事情があつても、集団から見れば和を乱す身勝手な行動と受けとられてしまうのでしょう。でも、私は思います。集団よりも、今を生きているその子をまず尊重すべきではないのかと。集団が個を規制する社会では、個は息を潜めて生きていくしかありません。個が生き生きすると、生き生きした個の集まりが集団を作っていくこと、子どもにとつての個と集団との関係は、そこを基盤にして体験的にわかつていくものではないのでしょうか。そして、そこに自分を理解し受け入れ、自

分を信じてくれる大人がいればこそ、集団と個が対峙するようなときにも、集団のために自分を律することができるようになるのです。一回許すとこれから先もずっとやらなくなるなんてことはない、私は信じます。

子ども（特に幼児）も、社会の一員である以上、どんな事情があるにせよルールは守るべき、小さいうちはまだよくわからないのだから、大人がきちんと教えてしつけるべきという考え方に、今、子どもたちは包圍されているような気がします。母親さえもがそう考えているようです。でも、幼児であつても、自分でさまざまなことを学びとつていくことができるし、事実多くを学んでいます。大人はそこを注意深く見取らずに、社会の枠を一方的に子どもに押しつけていないのでしょうか。幼児が納得するには、ことばでの説得ではなくて、それに見合う体験が不可欠です。幼児は、あ

れこれ自分で試してみなければ、自分というものも、他者も、社会もわからないのです。しかも、ほんとうにわかっていくためには、そこに、幼児の試行錯誤を見守り、他者や社会と幼児を仲介する大人の存在が必要なのです。外なる世界を自分の視点からしか捉えられない幼児に、信頼できる大人が他者の思いを適時に伝えるからこそ、幼児は集団のルールがわかり、受け入れようとしていくのです。また、いろいろやってみて、うまくいってもいなくても、共感し認めてくれる大人の存在があるからこそ、幼児は人を本当に信頼できるようにするのであり、自分に自信がもてるようになって、自分の世界を外に向かって広げていかれるようになるのです。大人が信頼できなければ、幼児は本来の自分を表現しなくなるでしょう。

その子らしさを発揮するより、集団に順応することがよしとされる環境では、子どもははみ出さずに生きていくでしょう。子どもはその環境に合わせて生きて

いくしかありませんから、意識せずに大人に合わせてしまうでしょう。なんとも切ない思いです。子どもが自己発揮しにくくなってきた今、せめて幼児教育の場は、子どもたちがひとまとまりにくくられないで、それぞれが自分の力であれこれ試し学んでいくことができる場所であってほしいと願います。たくさんの幼児が、枠に縛られずに自分を思いきり表現し、内なる力を発揮する喜びを味わう体験を、「幼児期」に積み重ねることができるよう切望します。

「ひとり」がその子らしく生きることが大切にされて、そういうひとりが集まって「みんな」ができて、みんなのかかわりの中から「みんなのために」が生まれ、ひとりがみんなをも大事にしていく社会がずっと続いていくよう心から望みます。

(元幼稚園教諭)